

ぽらりす

《2025年9月1日発行/毎月初めに天文台職員が情報発信します》



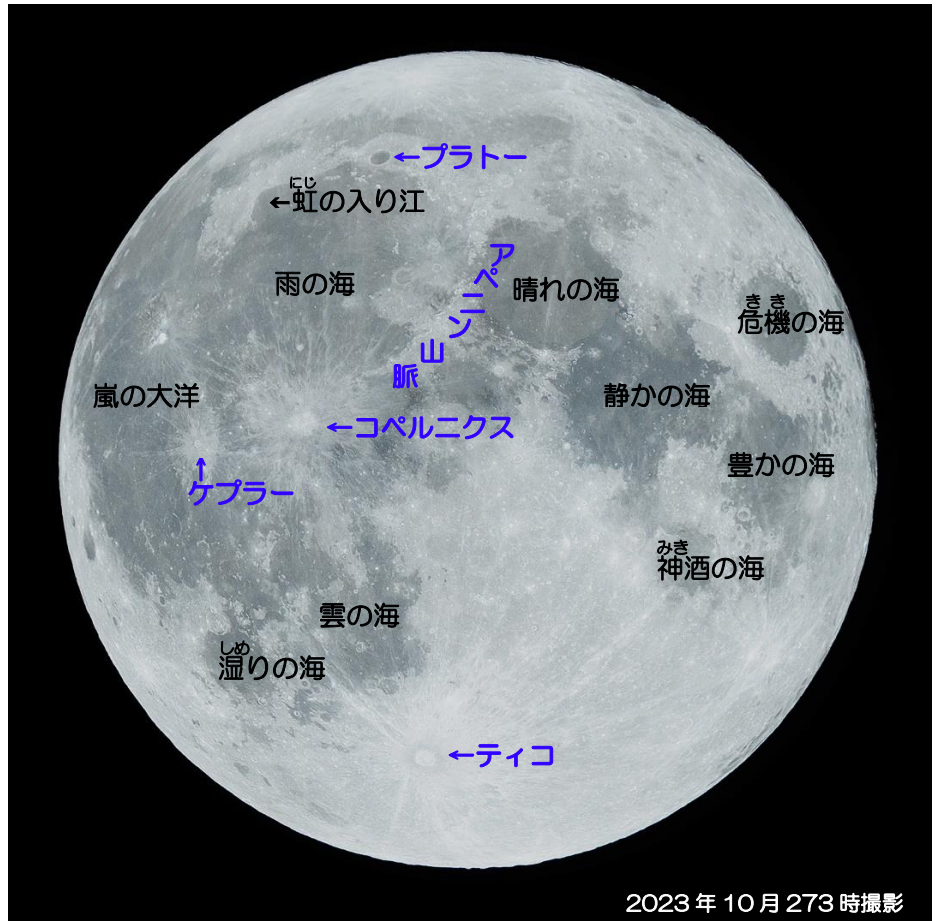
月の地形と地名

今月は8日未明に皆既月食、来月10月6日には中秋の名月がありますので、今回は月面の主な地形と地名をご紹介します。右の図をご参照ください。

月面の黒い部分は「海」と呼ばれ、玄武岩の平原が広がっています。白い部分は標高の高い部分で、無数のクレーターがあります。

満月の時期には太陽光に正面から照らされていますので、クレーターの陰影はあまり目立ちません。

月食は、月が地球の影に入り、徐々に欠けてゆき暗く見える現象です。今月8日の月食は札幌では深夜1:27から欠け始め、2:30から3:53の間に完全に月が地球の影に入る「皆既」となります。時間帯が深夜のため天文台の夜間公開はありません。



2023年10月273時撮影

ちなみに、通常の欠けている月と月食の時の欠けてゆく月とでは、クレーターの見え方が異なります。ぜひ両方をご覧ください。また、来年の3月3日にも皆既月食があります。こちらは18:50から欠け始め20:05～21:03まで皆既となります。天文台でも観望会を行いますのでお楽しみに。(横山明日香)



月のうさぎ

日本では、「海」と呼ばれる部分をうさぎに見立てています。これは肉眼でも見ることができます。

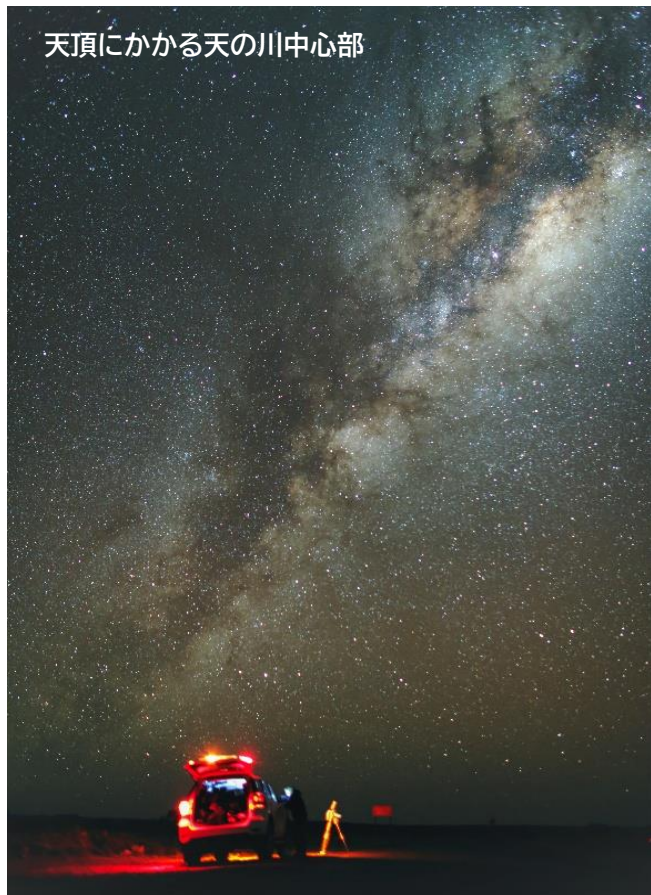


【南半球で見る星空】

地球から見える1等星の数は全天で21個ありますが、2等星は約70個、3等星は約180個と、1等暗くなると星の数は約3倍に増えていきます。街明かりや月明かりのない真っ暗な場所で見える最も暗い星は6等星でその数は約5500個。普段、私たちが見ている空は、全天の半分ですから一度に見られる星の数もその半分と考えても約3000個の星が見えることになります。札幌市天文台のある中央区は透明度の良い晴天の夜でも3等星がやっと見える程度、数にして約90個で天の川は見えません。日本ではどの場所においても自然の暗さより約8%以上も明るいそうで、星が綺麗というイメージの北海道も例外ではありません。宇宙から夜の日本を見ると街明かりで日本列島の形が分かるほど明るく輝いているそうです。それでは、街明かりが全くない真っ暗な場所で見える満天の星空とはどんなものなのでしょうか？

今年5月末、縁あって友人とオーストラリアの中央部を旅行しました。そこは、オーストラリアの有名な観光地のウルルに近く、自分を中心に半径200km以内に町がなく、街明かりの影響を全く受けない場所です。この時期の南半球は秋の季節、雨量が少なく快晴が続き、星を観るには最適の環境です。太陽が沈んで薄暮が終わると漆黒の夜空に無数の星々が輝き出します。最初はその星数に圧倒され見えている星座が何なのか解らず混乱しましたが、慣れてくると日本で見ている星座が逆さまになっているだけだとわかってきます。また、天の南極には北極星のような目印となる星はなく、周りの星座などから、この付近だと目星をつけます。天の南極周辺は北海道からは見ることができない領域ですが、南十字星をはじめ大小マゼラン銀河やエータ・カリーナ星雲など魅力的な天体が数多く分布していて、見飽きることがありません。特筆すべきは「天の川」で驚くほど明るく輝いています。滞在中、薄雲がひろがり明るい1等星しか見えない日がありましたが、その様な中でも薄雲を通して天の川の光芒が見えたのにはとても驚きました。北海道では南の地平線近くに見える「さそり座」や「いて座」方向は、天の川銀河の中心付近にあり、天の川が最も明るく美しく見える領域ですが、これらが天頂まで昇ってきます。天の川銀河を真横から見たダイナミックな姿が頭上に広がり、まるで自分が宇宙空間に浮かんでいるようにも感じられます。

天頂にかかる天の川中心部



南半球の星々を見ていると日本から遠く離れた所に来たと感じられ「地球の大きさ」に感動します。また、天の川を見ていると「雄大な天の川銀河とそれに属する無数の星々」に感動します。普段忘れていた「私たちが広い宇宙の中の『地球』で生きている」ことを再認識させてくれました。

(林 美輝)

☆9月の夜間公開（予約は不要です。公開時間内にお越しください。）

5日(金)～ 7日(日) 20～22時 月、夏から秋の星座

19日(金)～ 21日(日) 20～22時 土星、夏から秋の星座

休台日は、1日(月)、8日(月)、16日(火)、22日(月)、24日(水)、29日(月)です。